

## 論文要旨

本論文では、日常的な二者関係、特に、配偶者や恋人や家族といった親しい他者とのかかわりの中で、ネガティブな出来事に関する自己開示を控える態度と精神的健康との関連について検討を行った。具体的には、ネガティブな出来事に関する開示（行動レベル）を‘ストレス開示’と命名し、親しい他者に対してストレス開示を控える理由や意図や目標を総称して、‘ストレス開示抑制態度’と命名し、精神的健康との関連を検討した。

従来の研究では、自己開示の抑制による精神的・身体的健康状態へのネガティブな影響が主に実証されており、その理由として従来の尺度の問題点が挙げられた。また、自己開示の抑制と健康との関連において、行動レベルの自己開示や感情表出の抑制に関する検討が多かった。

これらの問題点を踏まえ、本論文では、ストレスの程度や社会文化的背景の異なる多様な集団におけるストレス開示抑制態度を網羅的に検討し、ネガティブな出来事の開示抑制といった現象の背景を理解できる理論的モデルを呈示するため、以下の3点について実証的検討を行った。第一に、親しい他者へのストレス開示を抑制する理由に焦点を当てたストレス開示抑制態度を測定する新しい尺度を作成した。第二に、社会文化的背景が異なる様々な集団におけるストレス開示抑制態度の検討から、同態度の社会文化的背景を検討した。第三に、ストレスの程度や社会文化的背景の異なる各集団における親しい他者へのストレス開示抑制態度がストレス開示や精神的健康へ及ぼす影響を検討した。

第四章では、親しい他者に対するストレス開示抑制態度を測定する30項目版の尺度（以下、IDS-30）を作成し、日本の大学生を対象に質問紙

調査、イギリスの大学生を対象にウェブ調査を行い、大学生における親しい他者へのストレス開示抑制態度を検討した ( $N_{JP}=611$ ,  $N_{UK}=204$ )。

その結果、親しい他者へのストレス開示抑制態度は、理論から想定された‘弱みの隠蔽’、‘あきらめ’、‘相手への配慮’、‘自己解消’、‘気晴らし希求’の5側面から構成されており、この5側面が日英において共通していることが確認された。

また、大学生における恋人に対するストレス開示抑制態度の精神的不健康への影響について検討した結果、両国の女子大学生において恋人に対する‘相手への配慮’が精神的不健康を促進するといった共通性がみられた。さらに、親しい他者に対するストレス開示抑制態度尺度の5項目版尺度（以下、IDS-5）を用いて、日英の大学生における複数の親しい他者（家族、親友、恋人）へのストレス開示抑制態度を比較した結果、尺度得点においてはイギリスの大学生が日本の大学生より全般的に高かったが、そのパターンは日英で共通していた。すなわち、親しい他者に対するストレス開示抑制態度は文化圏を超える現象であり、その量的な面（ストレス開示抑制態度の度合い（高低））においては異文化間の相違がみられるが、その質的な面（親しい他者に対するストレス開示抑制態度の精神的健康への影響や相手別相違のパターン）においては、異文化間の相違がみられず、対人関係における他者とのかかわり方が影響している可能性が示唆された。

第五章では、東日本大震災を経験していない一般成人を対象に質問紙調査を行い、IDS-5を用いて家族へのストレス開示抑制態度と抑うつとの関連を検討した ( $N=940$ )。また、東日本大震災を経験した一般成人を対象にウェブ調査を行い、IDS-30を用いて配偶者へのストレス開示抑制態度と精神的健康との関連を検討した ( $N=746$ )。

その結果、一般成人においても IDS-30 の 5 側面が明らかになり、親しい他者に対するストレス開示抑制態度尺度の交差妥当性が確認された。親しい他者に対するストレス開示抑制態度と精神的健康との関連については、全般的な精神健康状態の指標（GHQ-12, K6）に対して、既婚男性における親しい他者（妻、家族）への‘あきらめ’が精神的な不健康を促進し、‘自己解消’が精神的な不健康を抑制していた。この結果は、日本の男子大学生を対象とした分析結果と一貫していた。また、既婚女性における親しい他者（夫、家族）への‘相手への配慮’が精神的な不健康を促進していた結果は、日英の女子大学生を対象とした分析結果と一致していた。

また、東日本大震災を経験していない一般成人と、経験した一般成人における親しい他者へのストレス開示抑制態度が精神的健康へ及ぼす影響を検討した結果から、ストレスの大きさによって親しい他者に対するストレス開示抑制態度の精神的健康への影響が異なる可能性が示唆された。

第六章では、職務上、外傷的な出来事に繰り返してさらされる消防職員を対象に、親しい他者に対するストレス開示抑制態度が行動レベルのストレス開示や精神的健康へ及ぼす影響を検討した。具体的には、東日本大震災を経験していない日本の消防職員を対象に質問紙調査を行い、IDS-30 を用いて配偶者へのストレス開示抑制態度が日常生活におけるストレス開示や精神的健康へ及ぼす影響を検討した（ $N=554$ ）。また、東日本大震災の被災地へ派遣された日本の消防職員を対象に質問紙調査を行い、IDS-5 を用いて家族に対するストレス開示抑制態度が被災地での救援活動に関するストレス開示や精神的健康へ及ぼす影響を検討した（ $N=535$ ）。最後に、韓国の消防職員を対象にウェブ調査を行い、IDS-5

を用いて家族に対するストレス開示抑制態度が日常の現場活動に関するストレス開示や精神的健康へ及ぼす影響を検討した ( $N=256$ )。

その結果、親しい他者に対するストレス開示抑制態度尺度 IDS-30 の 5 側面が消防職員においても再現され、IDS-30 の交差妥当性が改めて確認された。

日韓の消防職員（既婚男性）における親しい他者（配偶者（妻）、家族）へのストレス開示抑制態度が精神的不健康に与える影響について検討した結果、日韓の消防職員いずれにおいても、親しい他者（配偶者（妻）、家族）に対する‘あきらめ’が精神的不健康を促進し、‘自己解消’が精神的不健康を抑制し、日本の男子大学生、日本の一般成人（既婚男性）と同様の結果が得られた。また、日本の消防職員においては、親しい他者（配偶者（妻）、家族）に対する‘相手への配慮’や、家族に対する‘否定的感情の開示’が精神的不健康を促進し、配偶者（妻）に対する‘対人ストレスの開示’が精神的不健康を抑制した。韓国の消防職員においてはストレス開示と精神的不健康の間に有意な関連はみられなかった。

以上の検討結果を総括し、本論文の結論を以下の 3 点にまとめる。第一に、親しい他者に対するストレス抑制態度は、‘弱みの隠蔽’、‘あきらめ’、‘相手への配慮’、‘自己解消’、‘気晴らし希求’の 5 側面から構成されており、ストレスの程度や社会文化的背景の異なる様々な集団においてもこの 5 側面が共通していた。これらの 5 側面は、意識の方向と抑制の帰属との 2 軸モデル (Figure 7-2-1 参照) で分類され、各側面によって行動レベルのストレス開示や精神的健康へ及ぼす影響が異なっていた。さらに、精神的健康との関連においては、行動レベルのストレス開示の影響より親しい他者へのストレス開示抑制態度が精神的健康へ及ぼ

す影響が大きかった。すなわち、自己開示の抑制と精神的健康との関連を検討する際には、行動レベルの自己開示の抑制のみならず、自己開示を抑制する理由も考慮する必要性が示唆された。

第二に、親しい他者に対するストレス開示抑制態度が精神的不健康へ及ぼす直接的影響の様相は男女で異なっており、親しい他者との関係における性役割観の影響が示唆された。男性においては、いずれの集団においても、‘あきらめ’と‘自己解消’が精神的健康と関連していた。一方、女性においては、いずれの集団においても、‘相手への配慮’が精神的健康と関連していた。すなわち、独立的で主張的になることを期待されながら学習している男性 (e.g., Wood & Eagly, 2002) においては、自己志向の側面が精神的健康と強く関連した。一方、他者との関係性が重視され、他者へのサポートや感情表出を期待されながら学習している女性においては、他者志向・他者帰属の側面が精神的健康と強く関連していた。

第三に、親しい他者に対するストレス開示抑制態度の中で、自己帰属の2側面(‘弱みの隠蔽’, ‘自己解消’)が精神的健康へ及ぼす影響がストレスの程度や性別によって異なっていた。すなわち、日常生活の中で男性が弱みを隠そうとすることや、女性が自分のストレス対処能力を信じて自己開示を抑制することは適応的であるが、東日本大震災のようにストレスの程度が個人の対処能力を超える場合には、自己帰属の理由で自己開示を抑制することが不適応を招く可能性が示唆された。

本論文では、従来の知見から不適応的と捉えられてきた自己開示の抑制を、抑制の背景に存在するストレス開示抑制態度と行動レベルの抑制の視点から検討し、行動レベルの抑制よりもストレス開示抑制態度が精神的健康へ及ぼす影響が大きいことを実証した。また、ストレス開示抑

制態度には適応的な側面も存在することを実証し、ストレスの程度や社会的役割によってその精神的健康への影響が異なるといった新しい知見が見出された。以上より、ストレス開示の抑制の背景にあるストレス開示抑制態度がストレス開示や精神的健康へ及ぼす影響を理解できる理論的枠組みを呈示できたと考えられる。本論文で得られた新たな知見は、従来の研究で散発的に検討されていた開示抑制に関わる諸要因を統合した理論的モデルを構築し、モデルを基に精神的健康への有効性を検討した成果であると考えられる。したがって、本論文は、自己開示の抑制と精神的健康との関連について新たな視点を提供したと考えられる。

(3933字/4000字)